

一、次の―のカタカナを漢字に直しなさい。⑤⑥は送りがなをふくめて書きなさい。

- ①相手の申し出をコジする。 ②芸術シジョウ主義の立場。  
④銅像のジヨマク式を行う。 ⑤殿様が家来をシタガエル。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【A】

はじめて訪れた場所で、人はどうすべきだろうか。そもそも何も気にせず自分のしたいようにする人もいるだろうし、どうすればその場所になじめるかを考える人もいるだろう。アメリカの作家バリー・ロベスがアラスカで出会った先住民は、知らない土地に来たらまず「耳を傾ける」という。ここに来たのには理由があり、自分はこうしたいのだが、それについてどう思うかと土地にたずねるというのである。言うまでもなく、これは新世界中に自らの欲望を押しつけ侵略したヨーロッパ人の態度とはまったく異なる。

①土地や海に「意見を求める」ことは、自らの欲求を「押しつける」とは対照的な行為である。②「意見を求めるといっても、土地や海は人間の言葉を話すわけではない。」③「だからといって、④人は環境と対話できないと考えるのは短絡的だ。ノーベル賞受賞作家J・M・クッツェーは、『動物のいのち』(一九九九年)で理性の限界に言及し、「他の存在の立場になって考えてみられる範囲に限界はありません。共感的な想像力に限界はないのです」と記している。「共感的な想像力」は、人間と環境を分け隔てる理性的思考に囚われず、環境へと分け入ることができる。

⑤環境の危機とは、突き詰めれば、想像力の危機である。森林伐採の破壊的な進行は、市場価値の高い作物の\*プランテーションにするために森を切り開いたらどうなるかを想像しなかった、あるいはできなかった、いや、それ以前に、森がどう思うかということに想像力が及ばなかったからにほかならない。同様のことは、工場排水の垂れ流しによる水質汚染、生産性向上のための化学肥料の使用による土壌の衰弱、大量に生産・消費・廃棄されるプラスチック製品による海洋汚染やマイクロプラスチック問題をはじめ、(a)枚挙にいとまがない。環境問題は、海や土や森や大気への「共感的想像力」の欠如が招いた結果だといっても過言ではない。

意外だと思われるかもしれないが、環境問題への一般的な関心の高まりには文学が関わっている。たとえば、アメリカではレイチエル・カーソン『沈黙の春』(一九六二年)が、日本では石牟礼道子『\*苦海浄土』(一九六九年)が(b)契機となり、環境問題への意識が高まり社会が動いた。文学が環境への想像力を喚起したのである。

環境への関心は自然と生じるわけではない。実体験、身近な人の話、心を揺さぶる読書体験など、無関心が関心へと変わるきっかけは人によってさまざまだろうが、共通するのは物語のはたらきである。問題となっている\*事象が実感を伴うかたちで意識化されるとき、つまり自分ごととしてとらえられるとき、そこには物語が(c)介在している。⑥物語は他者への共感を促し、活動的な生による一つの世界の制作へ誘うのである。

とはいえ、物語であれば何でも実感や共感をもたらすというわけではない。「実感」という言葉は、英語では make sense (意味を成す)という意味)がそれにあたる。環境思想家デイヴィッド・エイブラムによれば、真に「意味を成す」物語は、「感覚を活性化する」。物語によって感覚が呼び覚まされ、頭でわかるというよりも身体の内から納得する――文字どおり、⑦――とき、私たちは実感をもって問題と向き合いはじめる。知ってはいても、遠くの出来事

だったりスケールが大きすぎたりして実感がわかなかった問題に関して、想像力がはたらきはじめるのだ。

高度経済成長の負の遺産である四大公害病については、誰もが教科書で学んだ程度の知識をもっているが、このうち水俣病だけが今もなお\*アクチュアルな問題として論じられているのは、水俣病問題が⑧『苦海浄土』というすぐれた物語を得たからではないだろうか。『苦海浄土』で石牟礼は、チッソ水俣工場が象徴する「近代」という「途方もない化物を心やさしい物語り世界に編み替えて魂を吹きこ」んだ(石牟礼、イリイチ)。文学的\*技巧を駆使して水俣病問題が腑に落ちる世界を仕立てたからこそ、『苦海浄土』は出版から半世紀以上経った現在でも人びとの心を揺さぶり、共感的想像力を掻き立てているのである。「有機水銀を何とかして表現したかったが、実に非文学的でなじまなかった」という石牟礼の回想にうかがえるように、水俣病問題が腑に落ちる物語は、試行錯誤を経て結晶化した文学的想像力の産物にほかならない。

(中略)

文学を通して地球との向き合い方を考えるのは悠長だと考える向きもあるかもしれない。たしかに文学には、法律や政策のような\*実効性はない。けれども、⑨意味を成す物語に接してはじめて実感をもって現実と向き合えるのだとすれば、そこに文学特有の実効性があるのではないか。

(結城正美『文学は地球を想像する――エコクリティシズムの挑戦』による)

注 \*プランテーション――安い労働力を用いて綿花などを栽培する大規模な農場。

\*苦海浄土――作者が水俣病患者に取材してまとめられた書物。

\*事象――形となって現れる事柄。

\*アクチュアル――現実的に直面している。

\*技巧――すぐれた技術。

\*実効性――実際の効力を持つ性質。

問1 〓 (a)「枚挙にいとまがない」・(b)「契機」・(c)「介在」について、(a)・(c)の意味として最適なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(b)は、本文中からその意味にあたる語をぬき出して答えなさい。

(a) ア、解決に時間がかかる イ、困難で気が遠くなる  
ウ、数えきれないほど多い エ、忙しくて落ち着かない  
オ、目をそむけたくなる

(c) ア、原因となる イ、共存する ウ、生まれ出る  
エ、なかだちをする オ、動き出す

問2 ①「土地や海に『意見を求める』とあるが、これはどういうことか。ここより後の本文中の言葉を用いて簡潔に説明しなさい。

問3 空らん ② ①・③ ①に入る語の最適な組み合わせを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、②とはいえ ③すなわち  
イ、②まして ③けれども  
ウ、②そして ③そもそも  
エ、②ただし ③または  
オ、②もちろん ③しかし

テスト1の2

名古屋 東海中学校 (2024年度)

問4 ― ④「人は環境と対話できない」とあるが、この根本にはどのような考えがあるか。本文中から十六字でぬき出して答えなさい。

問5 ― ⑤「環境の危機とは、突き詰めれば、想像力の危機である」とあるが、どういうことか。最適なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、環境が破壊され続けると、それまでそこからもうけを得ていた人たちの気持ちに想像できなくなるということ。

イ、環境への働きかけが及ぼす影響を想像できなかったために、環境が破壊されていったということ。

ウ、環境の保全が難しくなってくると、それによって育まれていた人々の想像力も危うくなるということ。

エ、環境に手を加える際、過去の出来事を調べる手間を惜しんだために、想像以上の被害が生まれているということ。

オ、環境が破壊されてしまうのは、人間の活動の目的が何なのかを人々が想像できなかったためであるということ。

問6 ― ⑥「物語は他者への共感を促し、活動的な生による一つの世界の制作へ誘うのである」とあるが、どういうことか。最適なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、物語によって出来事を自分のことととらえ、今を生きる人々が実際に体験するような見方ができるようになること。

イ、物語に人がひきつけられることで、その内容を現実の生活に反映させることができるようになるということ。

ウ、物語に人が熱中することで、心の中で自分だけの世界を作り上げ、もう一つの人生を送るようになるということ。

エ、物語に親しんだ人がその経験を生かし、描かれていた世界を目に見える形にして、より現実的に味わえるようになること。

オ、物語を読む人が登場人物に感情移入することで、その人物が普段いっしょに暮しているかのように感じられるということ。

問7 空らん ― ⑦「に入る言葉を、本文中の五字で答えなさい。」

問8 ― ⑧『苦海浄土』というすぐれた物語」とあるが、どのような点が「すぐれ」ているというのか。本文中の言葉を用いて五十文字以内で説明しなさい。

問9 ― ⑨「意味を成す物語に接してはじめて実感をもって現実と向き合える」とあるが、あなたが読書を通じて「実感をもって現実と向き合」うことになった経験を、八十文字以内で説明しなさい。ただし、次の条件を満たすようにすること。

(1) このテストの「二・三」に挙げられている書物以外で書くこと。

(2) あなたの読んだ作品の「題名」を書くこと。

(3) どのような点に実感や共感を得たのかを明らかにすること。

問10 次は、東日本大震災の後に書かれた文章【B】と、それを読んだ先生と生徒の会話である。空らん【1】〜【3】に入るものを、後のうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

【B】

『三代実録』本文の持つ意味も変わった。遠い彼方の千四百年も前の出来事の記録が俄然、重みを増して心に響いてくるようになった。貞観といえは、十二世紀に描かれた『伴大納言絵巻』で有名な貞観八年(八六六)の応天門の変などが起きた時代であり、遠い過去の出来事の、文字や絵画世界での話でしかなかった。その三年後に起きた災害の記録が、今や現実そのもののイメージとしてきわめて鮮烈に浮かびあがってきたのである。

同じようなことは、一九九五年一月に起きた阪神淡路大震災の時にもあった。その折りに甦ったのは、十三世紀、鎌倉時代の

鴨長明『方丈記』である。この有名な古典には、京都を中心にした、大火、地震、飢饉など災害の様子がきわめて具体的に、研ぎすまされた筆致で描かれている。

(中略)

山―河、海―陸、土―水、巖―谷、地―家といった対比を基調にする\*漢文訓読の対句仕立ての文体で表現され、家の下敷きになった子どもの惨状や三カ月に及ぶ余震にもふれ、「\*恐れの中に恐るべかりける」は地震だ、とまで強調する。こういう描写を読むと、災害の表現には、漢文や訓読文体がよりふさわしく思える。現実をどれだけ対象化し、言語化して切り取りうるかで表現の質が決まるともいえる。

『方丈記』は阪神大震災であらたなりアリティをもって甦り、東日本大震災の災害は『三代実録』の記録を甦生させた。言い換えれば、そういう過去を描いた\*テキストによって、それを\*範型にして現実にした出来事をあてはめ、解読しようとするのである。表現のリアリティとはそういうことだろう。

(小峯和明編『日本文学史』による)

注

\*三代実録 ― 『日本三代実録』。平安時代に編さんされた歴史書。貞観十一年(八六九年)の大津波についての記述がある。

\*鮮烈 ― あざやかで強い印象を与える様子。

\*漢文訓読 ― 漢文(中国の古典)を日本語の文章として読めるようにすること。

\*恐れの中に恐るべかりける ― 一番恐ろしいもの。

\*テキスト ― 言葉によって書かれたもの。

\*範型 ― 手本となる形。

先生 【A】の文章の内容は読み取れたかな。次に、【B】の文章と読み比べてみましょう。

生徒 【A】は環境問題について、【B】の方は災害について書かれていますね。

先生 そうですね。【A】も【B】も文学が人間の自然や環境の見方に関わるという点では共通しているようです。他に気づいたところはないかな。

生徒 【B】では【1】の大切さにもふれられています。これは【A】でも同じようなことが言われていると思います。その一方で、【B】は【2】ところが【A】とは違うそうですね。そうですね。そして【B】では、【3】とまとめています。そうか、どちらも文学の大切さをうたえているんですね。

【1】

ア、もともとなる実際の体験

イ、法律のような実効性

ウ、用いられる表現や文体

エ、中心に描いている時代

オ、内容や表現の客観性

【2】

ア、現実を対象化して、災害を自分から遠いできごととして言語化している

イ、現実の出来事よりも、古典ではより強調されたイメージを受け取った

ウ、現実の災害の経験を、昔の記録の読み取りに役立てようと工夫した

エ、現実を起こった出来事によって、過去の作品がその価値を見直された

オ、現実の災害の恐ろしさを、古典を読み直すことで忘れようとしている

## 【3】

ア、出来事が古典に書かれた内容の現実味を増し、また古典が現実のとらえ方に役立つ

イ、出来事が人々に忘れられた過去の文学を思い出させ、再び手に取らせる役割がある

ウ、古典が人々を文学に目覚めさせ、生きることのリアルな価値を再認識させてくれる

エ、文学の内容が人生の規範となり、それに基づいて効果的な対処方法を教える

オ、出来事の本質が基礎となり、文学の解釈の仕方をより本格的なものに変えてくれる

## 三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

幼くして父を亡くし母と暮らす「わたし」（岸間冨）は、小学三年生になるころ、今までにない感染症の流行で生活に不自由を強いられた。そんな時、不登校の同級生、蒼葉の存在を知った冨は、母と共に蒼葉の家を訪ね、ろくに食事を与えられていなかった彼に何度もパンを届けて助けた。その後中学に進んだ冨は同級生に比べ何度が、今度は蒼葉が冨をかばった。中学卒業後、冨は高校に進学するが、蒼葉は進学せずに家の飲食店などで働きた。そして、冨が高校二年生の時に冨の母が病で亡くなってしまふ。以下はそれに続く場面である。

蒼葉は、通夜に駆けつけてくれた時から、なぜかわたしのことを岸間さんと呼んだ。半年ほど会っていなかったからだろうか。それとも改まった席だからだろうか。どこか違和感を覚えながらも、その時はどうしてか聞くことができなかった。それに、中学を出て、働きはじめた蒼葉は、先に大人になってしまい、わずかな距離ができたように思えた。

「岸間さん、受験勉強大丈夫？」

高校三年の春の終わり、日曜の朝にやって来た蒼葉がわたしに尋ねた。

「そのさ、岸間さんって、ずっと気になってたんだけど」

わたしは蒼葉の質問に答える前に、思い切ってそう聞いた。

「岸間さんで合ってるよね」

「合ってるよ。でもさ、今まで冨ちゃんって呼んでたでしょう？」

蒼葉が持ってきてくれた、バイト先の残り物だというクッキーを皿に入れ、紅茶を淹れてテーブルに置き、わたしは蒼葉の前に座った。

「ああ、そっか。そうだったかな」

蒼葉はわざとらしいことを言い、へへと照れ臭そうに笑った。

「で、どうして岸間さんって呼ぶのよ。なんか他人みたいじゃない」

「だってさ。ほら、俺ら①住む世界が違うじゃん」

「蒼葉は働いてるってこと？」

「それもあるけど、根本的にさ」

「何よそれ」

「何よそれって、岸間さんも気づいてるだろう？」

それは蒼葉が貧しいことを指しているのだろうか。高校に行っていないことを指しているのだろうか。でも、それは世界が違うと言うほどのことではない。いまいち意味がわからなかったから、

「わからない」

とわたしはきつぱり首を横に振った。

「本気で？」

「本気。だって、貧乏だからって言うなら、うちだって母子家庭で今なんてわたしだけでしょ。蒼葉が中卒って言うなら、学歴はそうかもしれないけど蒼葉の方が頭いいしさ」

「Aなるほど。俺ってすごいんだな」

蒼葉はそう笑ってから、

「俺さ、最初は岸間さんと自分が、すごく似てるって思ってたんだ。パンを持ってきた時にいろいろ話しただろう？俺は親に見放されて、岸間さんは母子家庭で母さんは忙しく働いてて、しかもおじいちゃんやおばあちゃんもいないってさ。似たような環境なんだなって、だからパンをもらうのも、それほど恥ずかしくなかった」

と言った。

「うん。今も似てるじゃん」

「どこがだよ。俺、中学三年で岸間さんと同じクラスになった時、気づいたよ。みんなから何を言われようと凛としてさ、ああ、岸間さんってしっかり愛されて育った人なんだって。揺るがないものが根底にある人だって」

愛されて育った。そこは蒼葉とは違うのかもしれない。否定できなくて、わたしは黙ってクッキーを口に入れた。

「そして、お母さんが亡くなった今も、岸間さんは変わらず、ちゃんとしてる。周りからも大事にされて、自分をなくさず、前を向いてる。すごいよな。愛情を受けてきた人ってこんなにまぶしいんだって、自分と似てると思ってたことが恥ずかしいよ」

蒼葉はそう言うとき紅茶を飲んだ。

「だからって、そんなに違うじゃないよ」

わたしが母から愛されていたのは明確な事実で、蒼葉が親の愛を受けていなかったのはなんとなくわかる。言葉が思いつかないまま、わたしは何とかそう言った。

「全然違うよ。勉強なんて問題集で何とでもなるけど、俺、教育も愛情も受けてないから、当たり前のことを知らないし、人として当然の心も持っていない。歯を毎食後磨くこととか、頭の洗いか、お箸の持ち方とか。知ってる人にあいさつすることとか、大事なものは人と分け合うとか。そういうのって参考書に書いてないだろう？だから、知ったのってほんと最近、社会に出てから。情けなくて笑えるだろう。Bえっと、靴下だけは一年替えなくていいんだっけ」

蒼葉は冗談めかして少し笑った。

「そんなのいつ知ったっていいことじゃない。Cあ、靴下は三日に一回は替えた方がいいだろうけど」

蒼葉に合わせて、わたしも軽口をたたいた。

「D三日に一回か。気をつける。俺さ、こないだ、幼稚園入園までの育児とかいう本、立ち読みしたんだけどさ、今までよく生きてたなって自分で驚いたもん。子どものころなんか汚い床に転がされてただけなのに、病気もせず言葉も話してる。奇跡の子どもだな」

「②だからって、岸間さん？」

「そう。ほら、俺たち仲いいだろう？」

「まあ、そうだね」

岸間さんと呼びつつ、仲がいいとは認めてくれているんだと、わたしは少しほっとした。

「だけど、好きになったらだめだって、自分を戒めてる。冨ちゃんなんて呼んでるうちに恋に落ちて結婚したら、冨ちゃん不幸になるから」

「不幸になるの？」

「なるなる。俺は愛情受けてないから人を愛することを知らないし、俺の将来なんて、家の飲み屋継いでずっと貧乏で借金に追われてる

だろうしね。俺なんて、一人寂しく酒飲みすぎて肝臓壊して死んでいくだけだよ」

蒼葉はそう言ってから、死ぬという言葉の口にしたことに気がとがめたのか、

「ちよつと、そんなことより、岸間さん、受験のこと聞いたんだけど。俺」

と慌てて話を変えた。

「あ、ああ。受験ね」

わたしは、【③】と、蒼葉に予防線を張られているのだ。そこに突き進む勇氣などない。それに、これ以上この話をするのは、蒼葉につらい思いをさせそうで、わたしも掘り下げるのはやめにした。

「どんな大学狙ってるの？」

「そうだな……」

「大学って、まずは何になりたいかによるよな。岸間さん将来何になる予定？」

「そう、えつと、わたしは……」

職業と考えると難しいけど、やりたいことはと思ひ浮かべると、小学三年生の時の蒼葉を思い出す。あのころから、子どものために何かできたらいいなと思つてきた。蒼葉みたいに「教育や愛情を受けていない」と言ってしまう子どもをなくしたい。生きるためのすべを教える場は家庭だけじゃないはずだし、愛情だって必ずしも親から与えてもらわなかった方がいいはずだ。悲しい思いを抱える子どもが少しでもいなくなれば。そういう思いは、蒼葉の家を初めて訪れた時から変わっていない。

その希望をかなえられる仕事。そうすると、小学校の教師が近いのだろうか。

感染症が流行中だった小学校時代に、学校こそがセーフティーガードだと思つた。その地域の子どもたちを把握し、その子どもたちに何かあれば救い出せるのは学校だって。子どもが埋もれてしまわないように手を差し伸べられる。余計なおせっかいだと気を遣うことなく、堂々とそれができるのは教師だ。もつとわたしたちを見てほしい。あの時そう言えなかったわたしは、自分が助けられる立場になりたい。

「小学校の教師かな」

「④ああ、すぐく岸間さんだ」

わたしの答えに、蒼葉はすぐにそう返してくれた。

「本当に？」

「似合ってるよ。うん、岸間さんが先生になったら、俺もうれしい気がする」

「そうかな」

蒼葉に言われると、自信が出てきて、小学校の先生になるしかないような気分にする。

「じゃあ、教育大？ 教育大だところからも割と近いじゃん」

「でも、ちよつと、それは難しいかな。教員免許さえ取れば」

進学校に通っているとはいえ県立の教育大学は難関だ。お母さんが残してくれたお金で私立の大学に行くという手もある。けれど、そうになると、先々の生活は厳しいか。わたしが迷っていると、

「俺、教えてあげるけど」

と蒼葉が言った。

「何を？」

「勉強」

「勉強？」

蒼葉はわたしの何倍も賢い。中学時代はテストはほぼ満点で、高校受験に向けても手伝ってくれた。だけど、今は蒼葉は高校に行っていないし、働いている。

「県立教育大学でいいよね。明日から過去問とか参考書とか先に解いてポイント押さえて、教えられるようにしておく」

「何それ。蒼葉も受験するってこと？」

「まさか。俺、もう働いてるし、中卒だよ。空き時間に勉強して教えて教えるってこと」

「それ、すごい無駄じゃない？ 時間とか労力とか」

自分の行かない大学の受験勉強をする。この先入試をするわけでもないのにだ。しかも、蒼葉は、日中はファストフード店やファミレスで夜は居酒屋や親の店で働いている。時間もないし、受験勉強がなにかのプラスになりそうもない。

「無駄じゃないよ。勉強、嫌いじゃないしさ。それに、どうせ調理師免許取る勉強もしようと思つてたから、ついでに」

「どこがついでよ。勉強内容違うでしょう」

「やりたいんだ」

「蒼葉、そんなに恩に感じてもらうことないのに」

中学の時わたしを守ってくれたのも、葬儀の後、ずっとそばにいてくれたのも蒼葉だ。何が必要？ 何度もわたしにそう問いかけてくれた。

「恩？」

「ほら、パンのこととかさ」

⑤わたしがおずおず言うのと、

「あの時、岸間さんが来てくれなかったら、飢え死にしてたかもな。小学生にして孤独死。怖いよな」

とE蒼葉は身震いする真似をして笑つた。

「飢え死になんて。そんなことなるわけないけど」

「まあな。でもさ、⑥岸間さんからもらったのはパンだけじゃないよ」

「そういうええ、お菓子も牛乳もあったね」

わたしがそう言うのと、蒼葉は本当におもしろそうに笑つた。

「Fジュースもカップ麺もあったっけ。つてそうじゃなくてさ。最初、パンをもらった時、驚いたけど、単純にうれしかった。お腹空いてたから二人が帰った後、三袋くらい一気に食べたよ。だけど、三日後また来てくれた時、本当に三日ごとに来てくれるんだってわかった時、もつともつとうれしかった。不安が消えるって、心配がなくなるって、すごく大きいことなんだとわかった。明日が怖いものではなく楽しみになったのは、あの日からだよ」

蒼葉はそう言うのと、

「俺があんな親の元に生まれたのに、それでも、ちゃんと生きてるのは、あの日のおかげだと思ってる」

とわたしの顔を見た。

恩義に感じてくれるのはありがたい。⑦けれど、それ以上に苦しい。たかがパンだ。そんなことにここまで感謝せずにはいられない子どもがいるなんて。きつと今も、あの日の蒼葉がどこかにいる。取りこぼさないで。毎日が不安な子どもがいることに気づいて。あの時小学生だったわたしは、大人たちに願っていた。

⑧そのわたしが、もうすぐ大人になるのだ。自分以外の大人がやってくれるのを待っていてはどうしようもない。

「やりたいからやるだけだよ。俺が賢いところ見せつけられるしさ。

その代わり、\*石崎のおばちゃんの夕飯、たまに俺にも食わせてよ」

蒼葉がそう言うのに、わたしはうなずいた。

「甘えて教えてもらおう。わたし、必死で勉強する」

「おお、がんばろうぜ」

（瀬尾まい子『私たちの世代は』による）

注 \*石崎のおばちゃん——冴が一歳の時から忙しい母親に代わって家事などのサポートをしてきている近所の女性。

問1 ――①「住む世界が違う」とあるが、蒼葉は冴をどのような人物としてとらえているか。三十字以内で答えなさい。

問2 ――②「だからって、岸間さん？」とあるが、このように言う冴の心情として最適なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、冴と蒼葉とでは住む世界が違うという蒼葉の説明に納得しつつもなんとか反論をしようとするが、それでもかたくなに自分を名字で呼ぼうとする蒼葉を嘆かわしく思っている。

イ、冴と蒼葉とでは住む世界が違うという蒼葉の真意を聞いて自分との違いはわかったものの、蒼葉に返す言葉が見つからず、うわの空になっている。

ウ、冴と蒼葉とでは住む世界が違うという蒼葉の言葉に理解せざるを得ない思いを抱きつつも、それを理由として名字で呼ぼうとする彼の態度に不満を覚えている。

エ、冴と蒼葉とでは住む世界が違うという蒼葉の言葉に自分を拒絶する思いを感じ取り、なぜ今さらそんなことを言うのかという気持ちを感じている。

オ、冴と蒼葉とでは住む世界が違うという蒼葉の言葉から自分と距離を置いていることがわかり、離れてしまった彼の心をなんとかつなぎ止めたいとあせっている。

問3 空らん【③】に入るものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、俺に関わるな

イ、受験に集中すべきだ

ウ、大切な人はすぐいなくなる

エ、将来を真剣に考えろ

オ、好きになるな

問4 ――④「ああ、すごく岸間さんだ」とあるが、この時の蒼葉の心情として最適なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、冴の将来の夢がとてもふさわしいものだ納得している。

イ、冴の将来の夢についての予想が的中したことを喜んでいる。

ウ、冴の特性を生かせる職業があったことに驚いている。

エ、冴はやはり自分とは住む世界が違う人だと尊敬している。

オ、冴が蒼葉の希望通りの仕事を挙げたことに満足している。

問5 ――⑤「わたしがおらず言う」とあるが、なぜ冴は「おらず言う」のか。その理由を説明した次の文の空らんを補いなさい。ただし、【A】は本文中の語句を用いて十字以内で書き、【B】は最適なものをア、オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

蒼葉が親切なのは、パンをもらったことを【A】からだと考えたが、【B】から。

ア、蒼葉はそんなことは忘れているかもしれない

イ、わざわざ自分が口に出すのはためられる

ウ、蒼葉の本音を聞かされるのは恥ずかしい

エ、自分の当てずっぽうな考えで自信がない

オ、蒼葉の親切心をむげに扱うことになる

問6 ――⑥「岸間さんからもらったのはパンだけじゃないよ」とあるが、パンをもらったことよって蒼葉の心情にどのような変化があったか。本文中から二十字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問7 ――⑦「けれど、それ以上に苦しい」とあるが、冴はなぜそのような思うのか。五十字以内で答えなさい。

問8 ――A、Fのやりとりの説明として適切なものを次のうちから全て選び、記号で答えなさい。

ア、過去の重苦しい話をしていてる場面で冗談を交え、二人が無理に明るく振る舞おうとする様子が表れている。

イ、仲が良いことから会話がはずみ、肝心の話題から外れて話が進まないことに気をもむ蒼葉の様子が浮きぼりとなっている。

ウ、冴が本音で話せる雰囲気を作るために、蒼葉が話題と関係なくおどける様子が表されている。

エ、暗い過去の話もわだかまりなく話すことができるのは、幼なじみで気のおけない間柄であることが理由といえる。

オ、冴と蒼葉の明るい雰囲気は、過去をふり返らずたくましく生きる二人の強さを表している。

カ、相手の冗談に調子を合わせ、その後に笑い合うような掛け合いは、二人の仲の良さを感じさせる。

問9 本文の内容に合うものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、蒼葉は、母を亡くしたばかりの冴に対して死という言葉を経々しく口にしたことを気にとがめ、冴の受験勉強を手伝うことでその責任を取ろうと考えている。

イ、冴は中学時代からずっと自分を支えてくれる蒼葉に、将来のことまで迷惑をかけたくないと思い、過去の話を持ち出して蒼葉の気をそらそうとした。

ウ、蒼葉にとっては冴の受験勉強の手助けをすることは自分の賢さを生かせる機会であり、時間と労力のかかることだとしてもやる意味があると考えている。

エ、蒼葉に応援されて自信がついた冴は、自分の夢のために蒼葉が無理をしようとするのは彼にとっても意味のあることだと考えている。

オ、小学生時代の、パンを受け取っていた時の蒼葉の思いを知った冴は教師になろうという思いがいよいよ強くなり、蒼葉の支援を受け入れようとしている。

問10 ――⑧「そのわたしが、もうすぐ大人になるのだ。自分以外の大人がやってくれるのを待っていてはどうしようもない」とあるが、冴はどのような教師になろうと考えているか。その理由もふくめて八十字以内で説明しなさい。

解答らん

(字数制限のある問題は、特に指示がない限り、文字以外の記号もすべて字数に入れること。)

[illegible]

|   |   |   |
|---|---|---|
| ⑤ | ③ | ① |
| ⑥ | ④ | ② |

[illegible]

